

内閣総理大臣賞受賞

共栄地区民全員が「一村一心」を合い言葉にして、親子二代にわたる30年間のむらづくりを形成

受賞者 きょうえいちくよかい 共栄地区を良くする会

わかやまけんひだかくんいなみちよう
(和歌山県日高郡印南町)

地域の沿革と概要

印南町は紀伊半島西海岸のほぼ中央部に位置し、町土の約72%が森林でその町域は海岸部から北東方向の山間部に向かい約20kmに渡り広がっている。年平均気温16.8、年間降雨量1,800mmと温暖多雨地帯であり、沿岸部は黒潮の影響を受け年間を通じてほとんど降霜は見られない。このような条件下で昔から、漁業、農業が盛んであり、特に農業は沿岸、中山間、山間とそれぞれの地域にあった農業を展開しており、印南町は第1次産業の町として発展してきた。

幹線道路として国道42号線が沿岸部を南北に、425号線が山間部を東西に走っており、平成16年には阪和自動車道が「みなべ」まで開通し、印南インターから大阪経済圏まで車で約1時間半の恵まれた条件となった。

また観光では熊野古道の要衝といわれ、五体王子と呼ばれる切部王子跡等、歴史的、文化的遺産などが今日に受け継がれている。

むらづくりの概要

1. 地区の特色

共栄地区は、印南町の中心部から約5km、車で約10分の距離にあり、

第1図 位置図



* 白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	2区3集落の集合体	
地区の性格	地縁のかつ機能的な集合体	
農家率	65.33%	
	(内訳)	
	総世帯数	76戸
	農家数	49戸
販売農家数	48戸	
	(内訳)	
	専業農家	24戸
	I兼農家	6戸
	II兼農家	18戸
主要作物	サヤエンドウ	990百万円
農業産出額	トマト	640百万円
(印南町全体)	ウメ	620百万円
農用地の状況	耕地計	49ha
	(内訳)	
	田	28ha
	畑	5ha
	樹園地	16ha
	耕地率	18.37%
	農家一戸当たり農用地面積	1.15ha

切目川の上流約 2 km の左岸、右岸の古屋と宮ノ前の 2 区からなる中山間部に位置する地域である。切目川沿いに施設や野菜畑、水田が広がり、山腹を利用しての果樹園も随所に見られる。

総戸数は 76 戸で、10 年間での変動は町営住宅等の建設による 8 戸の増加を見るだけである。農家戸数もほぼ横ばいで推移しており、就業者の高齢化や後継者不足等様々な問題が潜在化しているものの、専業農家率は 30% 以上あり町内では有数の農業地域である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

地域の活性化は「ひとつづくり」をいかに進めるかにつきる。ここに「ひとつづくり」に活動の柱を置き、「地域の発展は地域住民の主体性なくしてはなしえない」との信念のもとに取り組んだ組織がある。地域の意向を十分にくみ取り、自らの手で自分たちのむらの未来を切り開いていく。時には行政を利用しながらも自分たちのことは自分たちで考え、地域の合意形成のもと決断し実行する組織が「共栄地区を良くする会」である。

ア 「営農研究会」の発足

昭和 30 年代、共栄地区では主幹作目として夏みかんが導入され、地域の農業経営を支えてきた。しかしながら嗜好の変化とともに夏みかん価格が低迷し、農家の経営を圧迫するに至った。有望な代替え作物（主幹作目）が見つからないまま、多くの住民が農業に対して大きな危機感を抱き始めた。また数年に 1 度の割合で共栄地区を襲う切目川の氾濫は、農家の中にあきらめにも似た虚脱感を地域の中に醸し出していた。加えて河川にまつわる騒動で川を挟んだ二つの集落では争いが絶えなかった。このような地域全体を覆い包むがごとく暗澹たる想いと危機感の中で、逆に何とかしなければという強い思いが芽生えはじめ、地区の人たちを集結させ、思いを一つにしていっていった。そうした中で現況を打破しようと昭和 41 年、「共栄地区を良くする会」の前身「営農研究会」が結成され、この「営農研究会」を中心に農業経営の安定に向けた活動が開始された。

イ 「共栄地区を良くする会」の設立

「営農研究会」の取組が 10 年を経過し、農業経営の安定化が軌道に乗り始めた頃、共栄地区民がもっと仲良く語り合い、健康で心豊かな生活をおくれる環境をつくり、後継者が安心して農業に従事できるような基盤づくりをしたいとの思いが募り始めた。そして、地区全体の生活現場の環境整備と農業の基盤整備が必要との共通認識が生まれ、昭和 51 年、共に考え行動するむらづくり組織「共栄地区を良くする会」を立ち上げるに至った。

そして「地域社会の一人ひとりには、それぞれの持ち場がある。その持ち場を各自全員が自覚し、前向きな姿勢で取り組んでいけば人の和も、生活環境も、

生産基盤も、後継者育成もすべて解決し、明るく楽しい豊かな地域社会へと発展していく」との考えから、構成員は農家・非農家を問わず共栄地区に居住する老若男女すべてが参画するような形をとった。そして、全員が栄え、全員が幸せになることを願い、誰もが理解しやすい名前との考えから会の名称を「共栄地区を良くする会」(以下「良くする会」という。)とした。そして、『「全員で話し合う」「全員で計画を立てる」「全員で実行する」「全員で喜び幸せになる」共栄地区』をめざして次の4つの目標を立てた。

- ・地区民のコミュニケーションの場をより多くもち、心と心がひとつに解け合える心豊かな人間関係を作ること。
- ・農業所得の向上、安定を図ること。
- ・生活の無駄をなくし、合理的な生活をするための生活設計を図ること。
- ・環境整備をして住みよい地域社会にすること。

これら4つの目標に向かい、心豊かなむらづくりをめざして、その活動は当初より地域住民の主体性のもとに活動を展開している。そしてその考えは現在に至るまで地域の中で脈々と受け継がれている。

第2表 むらづくりに関する年表

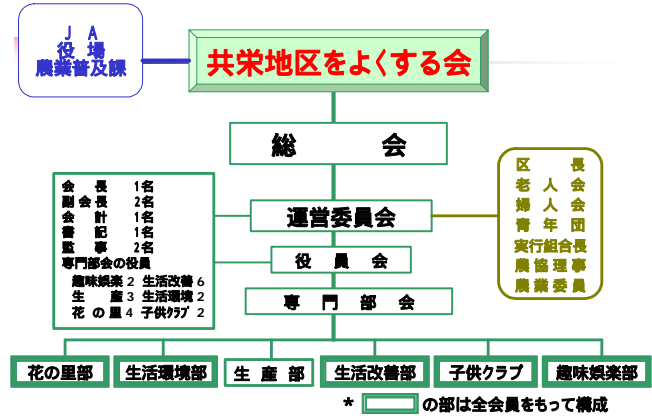
年次	生産面	生活面
昭和41年	・共栄営農研究会の発足	(昭和23年生活改善友の会の発足)
50年代	<ul style="list-style-type: none"> ・共栄地区を良くする会の結成 (51年) ・経営実態の把握と分析 生活・営農設計の樹立 ・生産組織づくり ・水田転作の有利品目の検討 ・土づくりの推進 ・実証展示圃の設置と優良品目の推進 ・米作コンクールの開催 ・「共栄生産者大会」の開催 ・施設栽培の導入推進 ・圃場整備の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・家計簿記帳グループの誕生 ・地区点検の実施 ・ガードレール、カーブミラー、防犯灯のブ ックによる焼却炉の設置推進 ・納屋コンクールの実施 ・冠婚葬祭の改善 ・農産加工の共同加工始まる ・農作業環境の改善 ・省力機具ア行、イ展の開催 ・「共栄くらしの祭」の開催 ・「共栄運動会」の開催 ・「ふるさと賛歌」の誕生 ・演芸大会の開催
60年代 (60年) (61年)	<ul style="list-style-type: none"> ・共栄農道道路の建設 ・水田裏作としてブロッコリーの新 品種検討と導入推進 ・性フェロモン試験園設置等環境に やさしい農業を開始 ・日本農業賞奨励賞受賞(集団の部) ・家の光協会感謝状家計簿グループ 	<ul style="list-style-type: none"> ・共栄橋の完成 ・廃びニールの適正処理 ・共有祭壇の購入と祭壇方式に よる告別式の実施 ・ゲートボール大会始まる ・機関誌「かけはし」の発行開始
平成元年～	<ul style="list-style-type: none"> ・共栄シンボルマークの決定 ・紫陽花の定植 ・コスモス街道、菜の花畑のオーブ ン等「花の里共栄」の発信開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・無人販売所の開設 ・共栄橋の完成 ・コンポストの普及による堆肥づ くり等クリーン大作戦開始
平成5年 6年 7年 8年 10年 11年 13年 16年 17年	<ul style="list-style-type: none"> ・花の里部の設置 ・農蚕園芸局長賞(生産部会) (水田農業への取り組みについて) ・産品所への取り組み開始 ・第1回環境保全型農業コンクール 大賞受賞 ・れんげ祭の開始 ・花の里販売所の完成 ・紫陽花等の花の定植開始 ・黒潮フルーツライン事業による 圃場整備の実施 ・農地区画整理 景観作目としてソバの試作 ・鳥獣害防止の共同防護柵設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川愛護活動知事感謝状受賞 ・生活改善部全員が応急手当員 の資格取得 ・食の祭典への参画開始 ・手作り憩いの家の完成
18年		・農業集落排水事業の実施

(2)むらづくりの推進体制

ア 老若男女総意のもとで

昭和55年、組織を部会制に改組し、各目標毎にそれぞれの専門部会を設置した。また運営委員会を設置し、会運営の潤滑化とより充実した活動をめざした。運営委員会は各団体や専門部会の合意形成を図る上での協議機関であり、総会について「良くする会」の意志決定機関で年間約15回の話し合いをもっており、むらづくりに関する提案や提唱を行っている。また「良くする会」が発足するまでは、各団体（営農研究会、生活改善友の会、老人会等）がそれぞれの立場で活動を展開していたが、発足後は「良くする会」が中心となり、活動方向を明確にし合意形成を図りながら活動を展開している。

第2図 組織図



また「良くする会」は発足当時より、印南町生活・営農研究グループ連絡協議会に加入し、町内のグループとの交流はもとより県内の多くのグループとの交流を積極的に行っている。

イ 地域住民の主体性による独自のむらづくり

「良くする会」は、当初から自主的な活動を目指しているため活動費は会費のみで充当されている。行政からの助成金は唯一平成8年に取組を開始した「れんげ祭」だけである。「れんげ祭」においても7年間自分たちの会費や事業収入だけで運営していたが、町の交流イベントの一環として組み込まれるようになった平成15年から町の助成を受けている。しかしながら企画・立案・運営等すべてに至るまで共栄地区全員参加のもとで行われている形は当初より変わらない。

むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1)老若男女全員が参加するむらづくり

共栄地区のむらづくりの大きな特徴は、当初より共栄地区に居住する農家・非農家を問わず老若男女すべてが構成員として参画し、全員の合意のもと活動を展開していることにある。各世代が自信を持ちそれぞれの役割を担っている。

また地域の活性化は地域住民の主体性のもとにあるとの信念から、自主的なむらづくりを展開している。

(2)時流に合った活動展開 - 都市住民と共生するふるさとづくり -

今何が必要なのか、何が求められているのかを分析し、目標設定も活動内容も時流に応じたものになっている。例えば 地域内に向けられていた活動を大きく転換、れんげ祭の開催や産品販売所の開設など交流活動を積極的に推進し、内から外へと視野を広げたむらづくりへと転換している。都市住民との交流は集落の景観や地域の伝統料理、また郷土色豊かな昔の遊びを見直すこと等にもつながり、女性や高齢者のさらなる意欲の醸成へとつながっている。また産品所運営は「花の里共栄」の情報発信の拠点と同時に地域農業の活性化にもつながり、特に女性の生産意欲の高まりへとつながっている。長年に渡る活動がマンネリ化せず、さらなる段階へとステップアップしているのは、このような時流にあったむらづくりを展開していることによる大きい。

(3)町をリードするむらづくり

環境保全型農業を町内へ普及させ、またブロッコリーやエンドウ類を町内の基幹作物として普及させた功績は大きい。加えて基盤整備等においても町内のモデル地区となり、先駆的地域として町をリードしている。

さらに共栄地区から発信した住民総意のもとに行う「共栄式むらづくり」が普及し、ともするとハード面に偏りがちだった地域活動を是正し、老若男女に優しい地域活動が日高管内に普及している。

(4)後継者が残る地区民に優しい住んでみたい共栄づくり

周辺地区では過疎化や高齢化が進み地域の活力が低下する中で、共栄地区では 30 年来変わることなく活動が続いている。これらは「良くする会」が後継者育成に力を入れ、常に未来を見据えた中で女性や子供、高齢者の意見を尊重し、むらづくり活動に反映させていることが大きい。老若男女が夢を語り、実現できる組織体制は、その夢を叶えるための地域全体の理解と協力を溢れている。

「良くする会」の活動に積極的に取り組んできた地区民の子供たちは親たちの強い願いと想いを受け継ぎ、現在会活動の中心的役割を担っている。

「むらづくりは人づくり、人づくりは心おこし」である。そして大切なのはむらおこし活動を通して、一人ひとりが自分のふるさとに誇りを持つことでもある。「一村一心をめざして」取り組んできた活動は、2 世代にわたり受け継がれ、より一層充実し、さらなる発展へとつながることが期待されている。

2. 農業生産面における特徴

(1)苦難の時代

昭和 30 年代、共栄地区では夏みかんを主幹作物として、水稻、露地ウスイエンドウを組み合わせた複合経営が行われていた。しかしながら、消費者

の嗜好の変化とともに夏みかん価格が低迷し、有望な代替作物が見つからないまま農業経営を圧迫するに至った。加えて水田も農道や水路の整備が遅れており、生産効率の向上が見込めない状況だった。このような状況を打破しようと有志が集い昭和41年「営農研究会」を立ち上げた。そして活動の目標を年間所得7桁に置き、栽培技術の向上と営農類型の確立を図るべく活動を開始した。

(2) 農業経営の安定化 - 活力ある産地づくりは全員の手で -

まず取り組んだのは、水稻裏作の新品目と水田転作の有利品目の検討である。先進地調査等を積極的に行い、裏作の新品目としてレタス、ブロッコリーの導入に取り組んだ。「営農研究会」が中心となり、現地技術組み立て実証圃の設置や栽培技術の講習会を重ね、技術の高位平準化を図った。また水稻の減反施策を活用して水田転作物としてスイカ、エンドウ類(オランダ、キヌサヤ)の産地化をめざした。このような活動の中でエンドウ類の連作障害を回避するため、太陽熱処理による土壌消毒技術の導入・普及に努め、エンドウの収量安定と規模拡大に成功した。

共栄地区全員の努力の中で、新品目の導入、農業技術の開発及び高位平準化が進み農業経営の新たな主幹作物として、スイカ、エンドウ類、ブロッコリーの栽培が確立された。またそれらの産地化及び生産量の安定化に向けた努力が実る中で、農業経営の安定化が図られるようになった。



写真1 ミニトマト栽培

昭和60年には専門部の中に新たにウメ部会を設置し、ウメ栽培を推進、現在では経営の中心をなしている。

また若い世代を中心にミニトマト栽培の導入が進み、「優糖星」としてブランド化をなし、市場で高い評価を得ている。

(3) 次代につなげ - 後継者が安心して残れる農業経営 -

「営農研究会」の取組が10年を経過し、農業経営が軌道に乗り始めた頃、「良くする会」が発足、より豊かな生活をめざし、農業所得の向上や農業経営の安定化をめざした。

新品目導入のための実証展示圃の設置、市場調査、栽培技術の発表会、優良圃の表彰等共栄地区民がともに話し合い、互いに研鑽し、切磋琢磨して技術の向上や産地化に取り組んだ。

その結果、ビニールハウスの導入によるエンドウ類の長期安定出荷は農業所得の向上、安定化に大きく貢献した。平成に入ると農協共栄集荷場だけで

年間販売金額も2億円以上となり、一戸当たり600万～700万円の販売をあげるようになった。その後輸入農産物の増加と景気の低迷で所得は期待したほどの伸びは示さなくなってきたものの、水田裏作として導入したブロッコリーは町内へ普及し印南町の特産物となり、エンドウ類に至っては印南町の基幹品目となった。こうした活動が評価され、昭和60年日本農業賞集團の部で奨励賞を、平成5年には水田農業への取組で農蚕園芸局長賞を受賞している。

(4)環境と人にやさしい農業をめざして

昭和60年後半、印南町内では特産のエンドウ類、スイカ、カスミ草、カーネーション等にシロイチモジヨトウの発生被害が確認されるようになった。シロイチモジヨトウは、生態的特性から農薬による防除が非常に困難で深刻な問題となった。このような中、共栄地区ではいち早くJAや県関係機関と連携をとり、性フェロモン剤利用の交信攪乱法による防除法の検討を平成元年から試験的に実施した。その結果、確立された技術は瞬く間に町内へ普及、平成7年度には約500haで環境保全型農業が実施された。またこの技術は労力面で慣行の3割減、経費面で4割減のコストダウンにつながり、経営面においても大きな効果をもたらした。この取組が評価され、第1回環境保全型農業コンクールにおいて大賞を受賞している。

近年ではミニトマト栽培者を中心にエコファーマーの認定者が増加、黄色蛍光灯及び循環送風機による減農薬栽培の実践とともに環境と人にやさしい農業が定着している。

(5)印南町の先駆的地域として

共栄地区では積極的に公共事業等を導入、ハード面でも理想とするむらづくりに向けて取り組んでいる。昭和59年には第2次農業構造改善事業で圃場整備を実施し、平成2年には共栄農免道路と共栄橋が完成し、平成13年からは黒潮フルーツライン事業による圃場整備を実施した。雪駄履きでいける圃場、散歩してみたい生産現場、そんな次代に自慢して残せる経営をめざし、整備された農道や圃場周辺には、アジサイやコスモス、アジュガ等景観植物を植えた。また農業集落排水事業の実施や長年の懸案事項であった切目川の水害対策も上流の真妻地区に多目的治水ダムの建設工事が開始し、河川改修も下流域から順に改修が進められている。このような事業実施の背景には多額の地元負担や土地の提供が余儀なくされるが、「良くする会」を中心に地元の総意を導き出し、いくつもの大事業実施に踏み切り、着実に成果を積み重ねている。こうした成果は農業立町印南の先駆的事例として町内へ普及し、種々の土地改良事業等へとつながり印南町農業の礎を築いた。

(6)今後の取組

平成17年度から印南町では学校給食に共栄で作られた「れんげ米」等地

場産米が供されている。今後はこのような活動をさらに助長し、産品所を核として地域に新鮮で安心できる食材をより一層提供していく。また、地域農業・地域活動の担い手として団塊世代の参入を推進する体制づくりを図っていく計画である。

3．生活・環境整備面における特徴

(1)歩くことから始めたむらづくり

志高く結成した「良くする会」ではあったが、当初は手探り状態の会活動であった。話し合いは夜更けまで続き、早くも12時、夜中の1時2時になることもままであった。そのような中、まず取り組んだのが「地域を知ることから始めよう」ということであった。会員で地域をくまなく歩いた地区点検の結果は顕著なものであった。それまでは不便だと思いつつも妥協してきた様々な地域の問題点が浮き彫りになった。ガードレール、カーブミラー、防犯灯等地域には足りないものが山積していた。「良くする会」は地図にこれらをすべて落としとしていき、地区住民の合意形成のもとそれら問題点をひとつずつ解消していった。昭和55年と58年の生活環境面についてのアンケート結果によると、55年には不備な点が80%と答えていた人たちが58年には34%へと激減している。まさに「良くする会」の地道な活動が実った成果である。また急激に増えつつあった施設栽培による廃ビニール処理の問題も取り上げ、地区をあげての回収は現在も続いている。

(2)一村一心をめざして

昭和50年代後半から平成の始めにかけて「良くする会」では一村一心をめざし、地域連帯感の醸成を目的に度重なる共栄地区あげてのイベントを開催した。農協の集荷所で開催した「共栄くらしのまつり」では子供から高齢者まで300点にも及ぶ作品が所狭しと展示され、入賞した人たちが良くする会会長より表彰された。「共栄演芸大会」では寸劇やカラオケ等で賑わい、河川敷や稲刈り後の水田を利用しての「共栄運動会」ではゲームや競技に老若男女が興じ、生活改善部の心を込めた昼食に舌鼓をうった。保育園児から70歳まで75名が参加したマラソン大会では、コスモス揺れる川沿いの道を語りながら走り、ふるさとの自然を満喫した。オリジナルソング「ふるさと賛歌」もつくられ、この時期は一村一心に向かってむらづくりへの熱い胎動が聞こえてくるような時代であった。

平成2年からは老若男女が楽しめるようにとの考えから「三世代交流ゲートボール大会」が毎年夏に開催され、多くのチームが参加し暑い日差しの中、地域中に笑い声が響き渡っている。

(3)心の橋「共栄橋」の完成と機関誌の発行にかけた地区民の願い

平成2年の「共栄橋」の完成は「良くする会」の活動の大きな成果のひとつでもある。完成以前は古屋集落と宮ノ前集落を結ぶのは、遠回りの古く狭

い橋だけであった。「良くする会」誕生後に話し合いの場が頻繁にもたれ、堤防をせめぎ合った二集落のわだかまりが消えつつあったものの、かつてのしこりが川の幅以上の距離感をもたらし、見えない心の壁を築いていたが、物心両面からその垣根を取り払おうと「良くする会」では積極的に行政へ働きかけ、橋の建設を要望した。そして「共栄橋」の完成は二つの集落の距離を縮めたという利便性だけでなく、心の垣根を取り払い心の距離をも縮めた。

また、古屋集落と宮ノ前集落をつなぐ共栄橋の建設が始まった昭和62年に「良くする会」の機関誌「かけはし」の第1号が発行された。橋の建設に幾多の想いを馳せ、橋が二つの集落をつなぐ夢のかけはしになればとの想いも込め、機関誌名も「かけはし」と名付けられた。現在は通算54号となる「かけはし」は今も二つの集落をつなぐ心の情報誌となっている。

(4)話し合いの拠点づくりも手作りで

発足当時の共栄地区には老朽化した小さな集会所があるだけであった。地区民全員で話し合える場所がほしいと「良くする会」では土地を提供、行政へと働きかけ、昭和62年に話し合いの拠点としての宮ノ前公民館が建設された。

また平成10年には行政の力を借りることなく資金調達から設計・施工に至るまですべて手作りによる「いこいの館」を完成させ、その名のごとく地区民の憩う場となっている。

(5)女性がリードするむらづくり

集落毎に生活改善友の会が結成されたのは昭和23年にさかのぼる。「良くする会」ができるまでは、各集落単位で活動をしていたが、会発足後は共栄地区生活改善部としてまとめ活動を展開している。

家庭菜園の充実や加工研究、郷土料理の伝承等に始まり、57年からは金山寺味噌の仕込みを共同ではじめ現在も続けている。生活改善部の中で母から子へ姑から嫁へと伝えられたふるさとの味は数知れない。また老人会のおもてなしちらし寿司づくりやゲートボール大会のカレー作り、区民のつどいの寿司づくり等も行っている。現在ではそれらに加え、れんげ祭や豆マラソン、食の祭典への参画等積極的に外に目を向けた活動を展開している。

またメンバーの中から有志により家計簿記帳グループが誕生した。食費の記帳から始まり57年には本格的に記帳を始めた。記帳により交際費が全国



写真2 郷土料理の伝承

平均より遥かに高いことが判明、交際費の節約に自家生産物を活用することを「良くする会」を通して共栄地区へ提案し、2年後には全国平均を下回る効果を上げた。また派手なお見舞いや葬儀のお返しにも着目し廃止を提案した。加えて冠婚葬祭の簡素化にも積極的に取り組み、61年には共有祭壇を購入した。このような活動が評価され家の光協会から感謝状が贈られている。

また余剰農産物のより効果的な利用法はないかと自家生産物の加工研究はもとより、平成元年以降の「花の里産品販売所」建設への布石ともなった無人販売所を設置した。無人販売所の売り上げはすべて女性の現金収入となり、女性たちの大きな楽しみの一つとなった。またそれは当時ではまだ少なかった女性名義の通帳作成へとつながっている。

(6)内から外へ活動を大きく変換 - 「花の里共栄」を発信 -

共栄地区を良くしようと始まった活動は年を経る毎にその内容を充実させていったが、平成5年その活動方向が大きく変貌を遂げた。多くの人に共栄の良さを知ってもらいたいとの想いが募ってきた。それを機に、ほとんど内に向いていた活動を外に向けて積極的に発信する活動へと変化させていった。地域のイメージづくりから始まり、折しも後継者を中心に施設の花栽培が増加していく時期とも重なり、共栄を「花の里」にしようと意見がまとまった。そして「花の里部」を新たに設置し、集落を花いっぱいにすることから取り組んだ。切目川沿いの堤防を利用したコスモス街道、3haの菜の花畑のオープン等それらは地域の人たちや訪れる人たちを楽しませている。

同時に新鮮・安全・安心のブランド産物づくりと地産・地消をめざし、花の里販売所を会員手作りで設置した。販売所運営は平成10年から本格化し、平成11年には県の補助事業を利用、「良くする会」が出資し、現在の花の里販売所建設に至った。売り上げは右上がりに順調な伸びをみせ、現在では年間2,000万円程の販売実績となっている。

(7)れんげ祭 - 高齢者の知恵や技術が活かされる -

「良くする会」が総力を挙げて取り組む「れんげ祭」は、平成8年から毎年4月の第1日曜日に開催されている。稲刈り後の水田にれんげを播種し、れんげ畑を活用した様々なイベントを実施している。地域内連帯感の醸成を第一目的に都市住民との交流による地域振興や特産品のPR活動等を通しての積極的な農業振興をめざしている。



写真3 れんげ祭

杵と臼による餅つき体験、餅まきに始まり、れんげ摘み、アマゴ釣り、地域特産品のウスイエンドウの皮むき競争、高齢者がここぞとばかりに張り切る竹細工、わら細工等手作り体験、子供たちが中心となって運営する宝さがし等、毎年内容に趣向を凝らした地域あげでの温かいもてなしは、多くの人たちを共栄へと引き寄せている。農村の良さと人の温かさを満喫した人たちはクチコミで年々その数を増し、昨年は約8,000人が共栄を訪れ遠くは京阪神に及んでいる。参加者は全員が共栄地区の人たちとの交流を楽しみ童心に帰り、それはアンケート結果にも顕著に表れている。

このような交流活動がきっかけとなり、平成15年からは大阪外語大学の学生たちがゼミで共栄地区を訪れ学生たちとの交流も始まっている。

(8)明日を拓くひとづくり

人に勝る財産はない。共栄の明日を担う後継者育成こそ「良くする会」の最大の命題であるとの考えのもと「明日を拓く人づくり」を目標に、後継者育成部会を立ち上げ、交流会の開催等による花嫁対策に始まり、子供たち対象の農業講座等様々な取組を行ってきた。また、子供たちの農業に対する思いや親の背中をみて感じたこと等純粋な気持ちを綴った冊子等も作成している。こうした活動からは、子供たちの成長を地域全体で見守ろう、育てようという共栄地区の強い意志が読み取れる。平成15年からは子供たちにも理解しやすい名前にと「子供クラブ」に名称変更し、その取り組みも小・中学生を対象とした食育等に重点を置いた活動内容に変更している。後継者不足に悩む地域が多い中で、この共栄地区では地域農業の担い手や地域活動の核となり活躍する人材にこと欠かないのは、こうした活動の成果と言える。



写真4 食育活動

